

学術映画

鉤虫(十二指腸虫)の生態

(仮題)

イーストマンカラー

全三巻

・スタッフ・

製作脚本

村山英治

演出

杉山正美

撮影

藤井良孝

撮影助手

二口信二

撮影助手

杉沢正夫

解説

東洋現像所

現像

東洋現像所

・製作指揮・

国立予防衛生研究所

小宮 義孝

安藤 幸雄

石井 俊雄

解説

人間の小腸の腸壁に咬みついて、たえず血を吸って生きつづける十二指腸虫の残酷な生態を、天然色映画で記録した世界で初めての映画！

人間を宿主として生きる寄生虫の中でも、最も毒猛で、しかもわが国民の三割以上に寄生しているといわれるもの。

その卵は糞便と共に地上にまかれ、子虫にかえって裸足の足や手の皮膚を破って侵入し、小腸に定着する。その不思議な寄生動物の生態に肉迫するカメラの眼。

「腸壁の深い絨毛の間に咬着して絶え間なく血を吸い、尻から吐き出して、腸壁を真赤に染めている無数の十二指腸虫の群。咬着し血を吸いながら交尾し、産卵する。地上の卵が孵化する生命の躍動の美しさ。皮膚から侵入する恐怖の一瞬。

客々、この映画は世界の寄生虫映画の水準を遙かに抜く高度の驚異的な記録だ」と、日本寄生虫学の权威者がそうして絶賛する。

あらすじ

農村の貧血患者の便を調べると、ほとんどといっていいぐらい鉤虫(十二指腸虫)の卵が見つかる。

鉤虫は小腸に寄生する長さ二センチ位の白い糸くずのような虫である。しかし、その口を顕微鏡で見ると、恐るべき牙をもっている。日本の農村にはツビニヒアメリカの二種が広く分布しているが、前者は二対の牙を、後者は一對の鉤丁のような歯板をもっている。

これまで学者の観察は、犬を借りて大鉤虫で行われていたが、この映画では最も残酷な人間のツビニヒ鉤虫の生態をとらえた。

一匹のツビニヒ鉤虫はアメリカ鉤虫の五匹分の血を吸う。一日〇・五CC位と推定されるから、三十匹もいると毎日盃一はいつも血をとられることになる。

彼らは腸壁に咬傷を残してときどき場所を変える。

卵は体外に出て、地表の適温下で二日位で孵える。

これが脱皮を重ねて、感染期の仔虫になるが、これが犬へんおもしろい。オーに透明な薄い皮ですっぽり包まれて外界からは栄養分がとれなくなり、体内に栄養顆粒と呼ばれる脂肪の塊を貯えているのが見える。これをエネルギー源として、じつと感染のチャンスを待つように彼らの体は作られる。

その運動にも同じように限りなき神秘性がある。

三、四月から十月頃までの間に、農民が温かな畑を裸足で歩いたり草どりをすると、露と共に手足に付着して、皮膚を貫いて入り、そこに「かぶれ」を残す。

世界で鉤虫に寄生されている人の数は、約五億といわれている。

仔虫は皮膚を貫くと血管に出、血流に乗って、二、三日に心臓から肺に出、肺から気管をあがって喉元まで行き、呑み下されて食道

協力団体

国民健康保険団体中央会
全国厚生農業協同組合連合会
全 国 農 業 協 同 組 合 連 合 会
保健福祉地区組織育成中央協議会
日本 学 校 保 健 会

協力者

日本医科大学 赤木勝雄
大阪大学 森下 薫
慶応大学 松林 久吉
東京大学 佐々木 孝
東北大学 山形 敏一
横浜市立大学 松崎 義周
神奈川県衛生研究所 児玉 威
岐阜県立医科大学 森下 哲夫
千葉大学 柳沢利喜雄
新潟大学 大鶴正満
大阪医科大学 岩田 繁雄
九州大学 小宮 俊郎
大阪市立大学 小田 俊郎

胃をさがって小腸上部に彼らの安住の地を見出すわけである。

感染子虫は野菜と共に口から入って感染することもある。この場合、よく喘息や肺炎と間違われるような症状を起す。若菜病といわれる。

自由に生きている一般の生物とは異り、腸壁に寄生する虫は、特異な生理を営んでいるので、これを生体外に移して飼育し、観察し、実験することは大へんむづかしい。しかし、研究者たちの努力は、一步步と体外飼育に成功して、体内に秘められた寄生虫の生理を明らかにしてゆく。鉤虫の生理、代謝関係が明らかにになると、駆虫剤の研究なども画期的な前進をいただけるのである。

鉤虫による健康上の損失は、貧血や慢性的胃腸障害、心臓病のような形で苦しんでいる人たちだけでなく、気がつかないもつと多くの人びとの労力力の損耗まで合せると、実に膨大な損害を毎年繰返しているわけだが、これもいつかは人間の努力でとりのぞかれる日が来るにちがいない。

企画 日本寄生虫予防協会
製作 株式会社 桜映画社
校賛 中外製薬株式会社

桜映画社 作品